

朝日新聞に見るピアニスト小倉末子

— 音楽家研究とデータベース —

津 上 智 実

Pianist Suye Ogura in the Asahi Shimbun: Musician Research and Newspaper Database

TSUGAMI Motomi

要 旨

ピアニスト小倉末子研究の一環として、『朝日新聞』における報道記事の全体像を明らかにすると共に、朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』の孕む問題点を指摘した。朝日新聞には最終的に総数148点の小倉末子関連記事が見出されたが、『聞蔵Ⅱビジュアル』のキーワード検索（キーワードは「小倉末子」「小倉末」「小倉」「音楽」）では81点しか見出すことができず、総数の6割にも満たない。その原因は、1）大阪版の扱い、2）キーワード採取のむら、3）ラジオ面の扱いにあり、これらが音楽家ないし音楽研究における「聞蔵」の利用価値を大きく損なっていることを具体的に示した。

小倉の報道記事の大半は演奏会の予告と報告であり、時に演奏批評を含む。帰朝から任命、転居や叙勲、訃報に至る個人の動向を報じる記事も継続的に見られ、インタビュー記事も興味深い。ラジオ出演記事はそのほとんどに写真が添えられて、小倉出演の報道価値の高さを裏打ちする。

1917年1月に連載された「人生の春～現代花形づくし」シリーズ（全8回）の第3回として、中條百合子、芥川龍之介に続いて取り上げられているのは特筆に値する。

「(表1) 朝日新聞に見る小倉末子記事数(検索対象別)」と「(表2) 同(年別)」を添え、末尾に「朝日新聞の記事一覧(目次)」を付した。小倉末子に関する報道は1916年の帰国から関東大震災のあった1923年までがピークをなし、その後は散発的になるものの晩年に至るまで息長く続いていった。特に小倉のラジオ出演は紙面でも写真入りで大きく扱われている。

1919年から1923年にかけての大阪版での報道は突出して数が多い。大阪朝日新聞社が大正期に積極的に後押しした女性のエンパワーメントにおいて、ピアニスト小倉末子はその流れに貢献すると同時に、自身も大きな場と力を得ていたことが改めて確認された。

キーワード：小倉末子、ピアニスト、朝日新聞、聞蔵、データベース

Abstract

This paper makes clear the overall picture of articles on Pianist Suyue Ogura (1891-1944) in the Asahi Shimbun during her lifetime on the one hand, and problems with the Asahi Shimbun Database 'Kikuzo II Visual' for musician research on the other. Of the 148 articles on Suyue Ogura in the Asahi Shimbun, only 81 articles can be found by a keyword search in the Kikuzo database. The main reasons for this inconvenience are: 1) pages from the Osaka Asahi Shimbun are not included in a keyword search, 2) the keywords designated are inconsistent and incomplete especially with articles regarding music, and 3) radio broadcasting announcements are excluded from keyword searches.

The contents of articles on Ogura are mainly announcements and reports of her public performances with some reviews. Her personal affairs, such as homecoming, employment, decoration, moving, and also sicknesses, were reported. There are three interview reports on her, and eight of her nine performances for radio broadcasting were announced with photos.

In January 1917, Ogura was highlighted in the 'Spring of Life, Star series of Today' as the third person following Yuriko Nakajo and Ryunosuke Akutagawa, followed by a young Kabuki star, an actress, and others.

Two lists of articles on Ogura in the Asahi Shimbun, one according to search fields and the other to years, as well as an index of her articles were made for further concordance. Ogura was reported on frequently from her homecoming in 1916 to 1923, the year of the Great Kanto Earthquake. Thereafter, articles on Ogura became sporadic but continued until her death in 1944.

The number of articles on Ogura in the Osaka Asahi Shimbun from 1919 to 1923 are prominent. It was during this time when Ogura was making contributions through her performances for women's empowerment supported by the Osaka Asahi Shimbun. The overall picture of the Asahi articles on her makes it clear that Ogura herself was greatly supported, especially during these years.

Key words: Suyue Ogura, pianist, the Asahi Shimbun, Kikuzo, database

1) 音楽家研究と新聞データベース

音楽家研究、特に埋もれてしまった過去の演奏家を再評価するに当たって、新聞データベースは重要な手掛かりを与えてくれる。残された作品を研究するのではなく、生前の活動を明らかにし、同時代の評価を知るためには、日々の報道を担っていた日刊紙での扱いが、まずは研究の基盤となる。戦火で自宅諸共に関連資料を焼いてしまったピアニスト小倉末子¹⁾ (1891-1944) の場合は尚更である。

2008年の読売新聞データベース「ヨミダス」公開に続いて、2010年に朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」(「聞蔵」と略記)が「明治・大正紙面データベース」と「昭和(戦前)紙面データベース」を増設して公開されたことで、戦前の音楽家研究に活用する可能性が広がった²⁾。

筆者はピアニスト小倉末子について、これまで様々なアプローチで実像の解明をめざしてきたが³⁾、現在の知見で「聞蔵」を見直してみたところ、そこには思いがけない問題が孕まれていることに気がついた。その問題は、一人小倉末子に留まらず、戦前の音楽家研究ないしは音楽研究に共通するものであり、これを整理して示すのが本論の一つの目的である。

朝日新聞は広く読まれた新聞である上、ピアニスト小倉末子とも関わりの深い新聞である。そこでの報道の全体像を示すことが、本論のもう一つの、より本来の目的である。

2) 「聞蔵」検索上の問題点

「聞蔵」の「明治・大正紙面データベース」と「昭和(戦前)紙面データベース」をキーワード「小倉末子」で検索すると47件、「小倉末」で検索すると53点(内47件は「小倉末子」分と重複)がヒットする。また、「小倉」のヒット件数4,773点中、ピアニスト小倉末子に関わるものが8点、「音楽」のヒット件数24,642点中(「見出し、キーワード、分類」で検索の場合)、同じく20点が見出された。

以上の小計81点は、しかしながら、小倉末子の名前を挙げた『朝日新聞』の総記事数148点(後述)の6割にも満たない。「聞蔵」のキーワード検索では、一人の音楽家の活動の半数近くが抜け落ちるというのは大きな驚きであった。その原因はどこにあるのだろうか。

①大阪版の扱い

原因の第一は、大阪版の扱いにある。朝日新聞は1879(明治13)年に大阪で創刊され、1888年に『めざまし新聞』を買収・改題して『東京朝日新聞』を創刊した後、翌1889年に大阪発行分を『大阪朝日新聞』と改題して、今日に至っている。しかるに「聞蔵」は、「大阪紙面については、1879年1月25日の創刊号から東京朝日創刊までの記事・広告と、全期間から選定した重要記事約2,000件、一部号外、関東大震災の影響で東京本社から紙面が発行されていない1923年(大正12年)9月2日～25日の記事・広告の書誌検索」⁴⁾が可能という形で作成されて

いるため、『東京朝日新聞』の発行期間中、『大阪朝日新聞』の記事は基本的にキーワード検索ができないという弱点を持っている。実際、『大阪朝日新聞』掲載の小倉末子報道記事58点中(後述)、「聞蔵」でヒットするのはわずかに1点⁵⁾である。大阪、神戸といった開港地を擁し、近代化の過程において東京に先駆けた動きをも見せた関西地区での音楽活動がすっぱり抜け落ちるのは、戦前の音楽家の多くが東京のみならず大阪を始め関西各地で活動したことを考えれば、致命的な問題と言える。「聞蔵」は大阪本社版と東京本社版の2つの紙面データを収録しているので、悉皆調査をすれば記事を見出すことは理論的には可能だが、「明治・大正紙面データベース」(紙面123,000ページ)と「昭和(戦前)紙面データベース」(紙面約88,000ページ)との合計211,000ページを悉皆調査することは現実的ではない。

②キーワード採取のむら

音楽活動に関する記事は、紙面の「音楽界」(1906年～)、「楽界消息」(1908年～)、「文芸美術」(1914年～)、「学芸たより」(1919年～)、「音楽たより」(1922年～)といった欄に見出されることが多いが、これらの欄に関して、キーワード採取の方針と精度に一貫性が見られず、大きなむらが認められる。一つの欄に収められた複数の催し物について、それぞれのキーワード(主催団体、会場、主な出演者等)を丁寧に拾い上げた例がある一方で、冒頭の行事しか拾っていないものも相当数あり⁶⁾、中にはキーワードを全く拾っていない例も⁷⁾散見される。キーワード採取の精度の粗いものがいくつか連続して現れたり、一定期間を置いて再び頻出するようになったりする様子を見ていると、担当者の当たり外れで精度が大きく異なっているように思われる。少なくとも音楽記事に関する限り、キーワード採取のルールは確立されないまま、担当者の裁量に任されていたものと推測される。このため、キーワード検索では音楽記事の多くが取りこぼされるという事態が生じている。明らかに演奏会の告知記事であるのに、キーワード「音楽」でヒットしない例(記事一覧 No. 77)もあり、問題の深刻さを感じさせる。

③ラジオ面の扱い

1927年にラジオ放送が開始されると、新聞には「きょうの放送番組」といった番組一覧が掲載されるようになるが、この番組一覧は検索対象とはされていない。このため、当日の放送番組の内、特に重要なものとして別建てで記事が掲載されているのでない限り、音楽家のラジオ放送での活動については検索してもヒットしない構造となっている。したがって、ラジオ放送に関しては、紙面を丹念に見て拾っていく他ないのが現状である。

以上、主な原因として3点を挙げた。これらが音楽家ないし音楽活動研究における「聞蔵」の利用価値を大きく損なっているのは残念なことである。

この他に、やや特殊な問題として、収録紙面の版の問題がある。「聞蔵」は「原則として最終版を用いましたが、時期によっては早版を使っている場合があります」と説明されているが⁸⁾、実際、最終版ではなく早版が収録されてしまったために、最終版には掲載されていた出演者のインタビュー記事と個人写真が「聞蔵」の紙面データからは得られないという例がある。

それは皇后の東京音楽学校行啓の報告記事（1916年11月17日、東京版、朝刊5面）で、最終版（第10909号へ）（記事一覧No. 13別）では主な出演者4人へのインタビュー記事と写真3枚「栄ある人々、（上図）玉座の前に居並びたる音楽学校の職員生徒、（右）御前演奏者、小倉すゑ子、（左）同久野ひさ子」が掲載されているのに対して、「聞蔵」収録の早版（第10909号口）（記事一覧No. 13）では写真も1枚のみで、インタビュー記事は含まれていない。この日の紙面について、なぜ最終版ではなく早版が選ばれたのかは疑問である⁹⁾。

3) 小倉末子の報道記事

筆者は小倉末子研究の初期において、大阪音楽大学音楽博物館の音楽記事集成を調査する機会を得た。この集成は、関西で発行された明治期以来の新聞雑誌に掲載された音楽記事を丹念にスクラップし続けてきたもので、その地道な作業は今日も続けられている¹⁰⁾。スクラップ帳で一杯の書架が立ち並んで、元ボーリング場の広々した校舎の一室を占めている様子は壮観である。これらのスクラップ帳を順に繰っていくことで、『大阪朝日新聞』の小倉末子関連の記事55点が得られた。この内、上述のように「聞蔵」のキーワード検索でヒットするのは1点のみで、残りの54点はスクラップされていたからこそ見出すことができたものである。

他に、これまでの調査の経緯の中で、紙面から得られた記事が『東京朝日新聞』に9件、『大阪朝日新聞』に3件ある（内9件は上記ラジオの番組一覧）。

以上から得られた小倉末子関連記事の総数は148点で、その内訳は「表1）朝日新聞に見る小倉末子の記事件数（検索対象別）」の通りである。

表1 朝日新聞に見る小倉末子の記事件数（検索対象別）

検索対象		小倉末子の記事件数
聞蔵Ⅱビジュアル 明治・大正 昭和（戦前）	キーワード：小倉末子（47点）	48
	キーワード：小倉末（全53点中）	6
	キーワード：小倉（全4,773点中）	8
	キーワード：音楽（全24,642点中）	20
	紙面から	12
	小計	94
大阪音楽大学音楽博物館音楽記事集成（全55点中）		54
合計		148

なお、明らかに小倉末子出演の演奏会に関する記事であっても、小倉個人の名前に言及していない記事（現時点で31点）は、この表1には含まれていない。それらの内、次の4点は小倉末子の独奏会に関するものとして看過できないため、特に書き抜いておく。

個人名はないが、小倉末子の独奏会に関する記事

1918（大正7）年10月30日（水）東京／朝刊7面5段 [KW：音楽]

「音楽奨励会の研究」今度音楽奨励会は洋琴以前の楽器時代より現代に至る迄の発達

を辿って六回に亘り発表する由にて来る十一月二日午後七時より本郷追分の帝大学生基督教青年会館に其第一回の演奏会を開く。

1919（大正8）年3月29日（土）東京／朝刊7面5段

「音楽奨励会」同会が洋琴音楽発達を研究し始めてから今回の演奏会は第四回となるが、熱心な聴衆は到底一日では収容し切れず、今回は来る二十九日午後七時よりと三十日午後二時よりとの二日として本郷の帝大青年会館に開く事となった

1919（大正8）年4月26日（土）東京／朝刊7面4段 [KW：音楽]

「音楽会」音楽奨励会の洋琴音楽発達研究の第五回演奏会は二十六、七の両日午後七時より本郷の帝大青年会館にて開かれ今回はブラームスとリストの作品に移る

1922（大正11）年2月15日（日）東京／朝刊7面4段 [KW：音楽]

「音楽」音楽奨励会は来る二十五日午後七時から丸ノ内日本工業倶楽部に於て第四十八回演奏会を催す事となりベートーヴェンの作品を独奏する

表1に含まれる148点については、本論の末尾（139頁以下）に「朝日新聞の記事一覧（目次）」を掲げる（以後、この記事一覧に付した番号を用いて照合の便を図る）。

4) 記事の内容

小倉に関する記事の大半は演奏会の予告と報告であり、時に演奏批評を含む。

帰朝（Nos. 1-4）や任命（No. 16）、転居（No. 91）や叙勲（No. 138）、訃報（Nos. 146-147）といった個人の動向を報じる記事も見られるが、その中で「小倉末子女史、令姉の病気により一切の家庭音楽教授中止」（No. 75）、引続いて「小倉末子女史、八月三日より令姉と共に沼津に赴き九月上旬頃まで滞在の予定」（No. 76）とあるのは興味深い。自宅レッスンの中止が新聞で報道されるというのは現代では考えられないが、当時これを報道する必要があると新聞社側が判断した事実は心に留めておくべきだろう。

インタビュー記事も3件ある（Nos. 18, 30, 122）。この内、1917年8月29日付（No. 18）は「久野女史高等官になる、ピアノの天才、小倉女史激賞」という見出しで、「之に就いて音楽学校教授小倉末子女史は語る」と始まる。久野久子の助教授昇進の報道記事であるから、インタビューをするなら久野本人にするのが筋であるのに、小倉一人のインタビュー記事になっているのは不思議なことである。

1920年代以降、弟子関係の記事で小倉の名が言及されるようになる（Nos. 88, 121, 126）。

ラジオ放送への出演については、小倉が弾く時には必ず「きょうの放送番組」欄の他に別枠で取り上げられ（Nos. 109/110, 116/117, 119/120, 123/124, 127/128, 129/130, 131, 133/134, 136/137, 139/140）、その大半（10回中8回）が写真入りの記事となっている。これは、小倉のラジオ出演が写真入りで大きく報道するに値すると考えられていたことを示している。

5) 「人生の春～現代花形づくし」シリーズ

1917年1月7日付(No. 15)は「人生の春(三)～現代花形づくし～小倉末子」というタイトルから知られるように、「人生の春、現代花形づくし」というシリーズの一環である。一体、小倉末子はどのような人々と共に取り上げられたのだろうか。

このシリーズは1917年1月3日から12日まで8回にわたって連載された。そこで取り上げられたのは次の人々である。

- 第1回(1月3日) 中条百合子(当時18歳) 作家
- 第2回(1月5日) 芥川竜之介(当時24歳) 作家
- 第3回(1月7日) 小倉 末子(当時25歳) ピアニスト
- 第4回(1月8日) 中村 福助(当時17歳) 歌舞伎役者
- 第5回(1月9日) 伊藤 小坡(当時27-28歳と紹介、実際は29歳) 日本画家
- 第6回(1月10日) 吉野 作蔵(当時39歳) 政治学者
- 第7回(1月11日) 中村 歌扇(当時28歳) 女優
- 第8回(1月12日) 本居 長世(当時32歳) 作曲家

シリーズ初回の中条百合子(後の宮本百合子)(1899年2月13日生)は、前年秋「貧しき人々の群」を発表し天才少女として注目を集めた。記事では「貧しき人々の群」と「日は輝けり」に言及し、養育歴を紹介。

第2回の芥川竜之介(1892年3月1日生)は前々年に「羅生門」、前年に「鼻」を発表し、同年5月に初の短編集『羅生門』を刊行することになる。記事では収入や人柄を紹介。

第4回の中村福助(成駒屋5代目)(1900年5月10日生)は前年4月に五代目中村福助を襲名。記事では育ちと無口さ、前年の襲名と最近の評判のよさを紹介。

第5回の伊藤小坡(1877年4月24日生)は前々年に文展で初入選で三等賞受賞。上村松園に次ぐ女流画家として脚光を浴びた。記事では文展の出品作と、娘3人や夫との家庭生活を紹介。

第6回の吉野作造(1878年1月29日生)は前年、評論「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表して大正デモクラシーの代表的論客となった。記事では風采、道楽と子宝を紹介。

第7回の中村歌扇(1889年8月15日生)は浅草の「娘美園一座」で人気を集めた女優で、前年から神田劇場で座頭として活躍。記事では生い立ちと人気、養父の希望(廃業と堅気の結婚)を紹介。

最終回の本居長世(1885年4月4日生)は前年一杯で音楽学校助教授を辞めて、童謡作家として名を成していた。記事では人柄と血筋をエピソードで紹介。

このように各界でめざましい活躍を始めていた人々を紹介したシリーズの第3回でピアニスト小倉末子は紹介された。中条百合子、芥川龍之介、小倉末子という並びであったことは特筆

に値するだろう。

6) 朝日新聞とピアニスト小倉末子

次に掲げる「(表2) 朝日新聞の小倉末子の記事件数(年別)」を見ると、小倉末子に関する報道は1916年の帰国から関東大震災のあった1923年までがピークをなしており、その後は散発的になるものの晩年に至るまで息長く続いていったことが分る。1930年の十五年戦争開始後は報道が激減するが、例外はラジオ出演で、小倉末子のラジオ出演は紙面でも大切に扱われたことは上述の通りである。

表2 朝日新聞の小倉末子の記事件数(年別)

西暦	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
東京	1	4	6	10	8	4	1	12	2	0	0	3	3	1	1	1
大阪	1	8	0	0	3	8	16	8	10	0	3	0	0	0	0	0
合計	2	12	6	10	11	12	17	20	12	0	3	3	3	1	1	1
写真	0	3	1	0	2	2	4	2	3	0	1	1	3	0	0	0

西暦	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	合計
東京	4	6	6	4	0	0	4	0	2	3	0	1	0	3	90
大阪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	58
合計	4	6	6	4	0	0	4	0	2	3	0	1	0	4	148
写真	2	2	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	32

この表2から明らかなように、1919年から1923年にかけての大阪版での報道は突出している。これが大阪で旗揚げをした婦人会活動と密接に結びついていたことは、すでに別稿で論じた¹¹⁾。この5年間はピアニスト小倉末子にとっても特別な時期であったことが、今回、朝日新聞における報道全体を検討したことによって、改めて浮き彫りになった。大阪朝日新聞社が大正期に積極的に後押しした女性のエンパワーメントにおいて、ピアニスト小倉末子はその流れに貢献すると同時に、自身も大きな場と力を得ていたのである。

謝辞：本論は、2013年度神戸女学院大学研究所「研究助成」による研究成果の一部であることを記して感謝する。

注

- 1) 戸籍上は「小倉末」であるが、演奏活動の多くと著書3冊を「小倉末子」で行っているため、後者の表記を用いる。
- 2) 読売新聞については、津上智実「読売新聞に見るピアニスト小倉末子」『神戸女学院大学論集』第55巻2号(2008)53-68頁を参照。
- 3) 津上智実、橋本久美子、大角欣矢『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』(東京藝術大学出版、2011)を参照。
- 4) 出典は、http://database.asahi.com/library2/main/help/meizi_taisyo_db.html
- 5) 1921年6月3日の記事「肉声の美と器楽の妙」(記事一覧No.65)がキーワード「小倉末子」でヒッ

トする。これ以外の57点はキーワード検索の対象からは外れている。

- 6) 記事一覧 No. 78 の場合、キーワードは「慶應マンドリンクラブ」のみ。
- 7) 例えば1921年8月2日、9月20、21、23日、10月6日付の東京版朝刊「音楽」欄。
- 8) 出典は註4に同じ。
- 9) 朝日新聞社に問い合わせたところ、「関東大震災や東京空襲により、当時の保存紙面が焼失消失」したもののについて「最終版を入手できなかったケースがあったため」との回答を得た。
- 10) その丹念さは、新聞紙面の余白に印刷された記事にまで及んでいる。1916年6月25日付（記事一覧 No. 11）はその好例。
- 11) 津上智実「ピアニスト小倉末子と大正期の女性運動」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』第25巻（2010）95-118頁。

朝日新聞の記事一覧（目次）

略号：

大音＝大阪音楽大学音楽博物館音楽記事集成

KW＝朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』の検索キーワード（小倉末子、小倉末、小倉、音楽）

紙面＝紙面から直接拾ったもの

下線は筆者

- 1) 1915（大正4）年11月3日（水）大阪／朝刊7面1-4段【大音1】
「米国で一晩五百弗の環女史、お正月は日本で＝小倉女史も帰る」
- 2) 1915（大正4）年11月4日（木）東京／朝刊5面7段【KW：小倉1】
「蝶子夫人で大持の環女史」又之も米国で持囃されているピアニスト小倉清子【ママ】嬢
- 3) 1916（大正5）年4月24日（月）東京／朝刊5面3-5段【写真（2段抜）：小倉末子嬢女史（鎌倉丸甲板にて）】【KW：小倉末子1】「楽壇の新星帰る、小倉末子女史、マリア夫人の気焰」
- 4) 1916（大正5）年4月24日（月）大阪／夕刊2面4-6段【大音2】
「天才ピアニストと謳われた小倉末子帰る」
- 5) 1916（大正5）年6月14日（水）東京／朝刊7面5段【KW：小倉末子2】
「文芸美術」「小倉末子独奏会」十七日、東京音楽学校、音楽奨励会主催、新婦朝者小倉末子女史の独奏会
- 6) 1916（大正5）年6月16日（金）大阪／朝刊7面7段、記事【大音3】
「小倉末子嬢独奏会」日本健康会の施薬費醸出、二十六日、京都三條青年会館、ピアニスト小倉末子嬢
- 7) 1916（大正5）年6月17日（土）大阪／朝刊7面8段【大音4】
「神戸でも小倉女史演奏」二十四日、慈善音楽会、湊川聚落館
- 8) 1916（大正5）年6月19日（月）東京／朝刊7面3-4段【演奏評】【KW：小倉末子3】「小倉女史独奏会」音楽奨励会、ピアニスト小倉末子女史を聘して十七日、独奏会（リサイタル）を催した
- 9) 1916（大正5）年6月24日（土）大阪／朝刊7面8段【大音5】
「慈善音楽会」羽衣管弦団主催、二十五日午後七時半、北濱帝国座、小倉末子
- 10) 1916（大正5）年6月24日（土）大阪／夕刊2面1-5段【写真（4段抜）：ピアニスト小倉末子】【大音6】二十四日は神戸、二十五日は北濱帝国座、新婦朝の天才的なピアニストと称えられる小倉末子
- 11) 1916（大正5）年6月25日（日）大阪／朝刊10面左欄外および3面右欄外【大音7】
「小倉末子嬢演奏」神戸に於ける小倉末子嬢の演奏会は二十四日

- 12) 1916 (大正5) 年6月26日(月) 大阪／朝刊7面6-7段 [大音8]
「雨の夜の音楽会、帝国座に於ける小倉末子嬢の演奏」
- 13) 1916 (大正5) 年11月17日(月) 東京／朝刊5面1-5段 【写真：音楽学校行啓】 [第10909号口] [KW：音楽1] 「音楽学校の光栄、皇后陛下行啓」 小倉米子 [ママ] のピアノ独奏、ピアノの名手として知られたる講師小倉末子
- 13別版) 1916 (大正5) 年11月17日(月) 東京／朝刊5面1-3段 【写真：栄ある人々、(上図) 玉座の前に居並びたる音楽学校の職員生徒、(右) 御前演奏者、小倉すゑ子、(左) 同久野ひさ子】 [第10909号へ] 「御嗜みに一入の御興、皇后宮音楽学校に行啓、芸術に国境なしとて、独逸の名曲を御所望」講師小倉すゑ子
- 14) 1916 (大正5) 年11月17日(金) 大阪／夕刊2面2-3段 【写真：久野久子、小倉すゑ子、田中久子、山口節子】 [紙面1] 「御前演奏の七閨秀音楽家、皇后陛下音楽学校行啓」講師小倉すゑ子女史
- 15) 1917 (大正6) 年1月7日(日) 東京／朝刊5面8-9段 【写真：小倉末子】 [KW：小倉末子4]
「人生の春(三) ～現代花形づくし～小倉末子」
- 16) 1917 (大正6) 年4月6日(金) 東京／朝刊3面8段 [KW：小倉2]
「音楽学校教授任命(五日)」任東京音楽学校教授 小倉すゑ
- 17) 1917 (大正6) 年5月20日(日) 東京／朝刊7面4段 [KW：音楽2]
「特殊学校音楽会」東京市特殊小学校後援会、二十日、慈善音楽会、ピアノ独奏 (小倉すゑ子)
- 18) 1917 (大正6) 年8月29日(水) 東京／朝刊5面7-8段 [KW：小倉末子5]
「久野女史高等官になる、ピアノの天才、小倉女史激賞」之に就いて音楽学校教授小倉末子女史は語る
- 19) 1917 (大正6) 年10月19日(金) 東京／朝刊7面3段 [KW：小倉末子6]
「音楽会」瀬戸口海軍楽隊の退職に際して同氏送別の音楽会を来る十一月四日、小倉末子、
- 20) 1917 (大正6) 年11月5日(月) 東京／朝刊5面1段 [KW：小倉末子7]
「花環に埋まった瀬戸口楽長、昨日帝劇で開かれた告別大演奏会」斯界の人気者小倉末子
- 21) 1918 (大正7) 年2月19日(火) 東京／朝刊7面3-4段 [KW：音楽3]
「独奏と独唱」間に加わった小倉末子女史の独奏は当夜の会の人気を引き立たせた
- 22) 1918 (大正7) 年3月1日(火) 東京／朝刊5面10段 [KW：音楽4]
「グノー百年祭記念音楽会」小倉すゑ子
- 23) 1918 (大正7) 年4月18日(木) 東京／朝刊1面4段、広告 [KW：小倉末子8]
「朝鮮教化事業慈善大音楽会」四月二十七日、帝国劇場、主催者：小倉末子女史、
- 24) 1918 (大正7) 年4月20日(金) 東京／朝刊6面6段、広告(=4/18) [KW：小倉末子9]
- 25) 1918 (大正7) 年4月23日(火) 東京／朝刊9面4段 [KW：小倉末子10]
「小倉女史の思立ち」鮮人の教化に対し思う時のあった小倉末子嬢
- 26) 1918 (大正7) 年4月25日(木) 東京／朝刊7面5段 [KW：小倉末子11]
「朝鮮教化音楽会」小倉末子女史主催、二十七日、帝国劇場、朝鮮教化事業、慈善音楽会
- 27) 1918 (大正7) 年4月29日(月) 東京／朝刊7面4段 [KW：小倉3]
「小倉女史の音楽会」朝鮮教化事業に寄附する目的で健気にも小倉女史は自らの腕を頼って独りで立って
- 28) 1918 (大正7) 年5月6日(月) 東京／朝刊7面4段 [KW：音楽5]
「ザレスカ夫人演奏会」幸田安藤小倉各女史及びドロウィッチ夫人キクロフ氏等が賛助出演
- 29) 1918 (大正7) 年12月15日(日) 東京／朝刊7面4段 [KW：音楽6]
「音楽会」音楽奨励会、第二回を十六日、本郷の帝大青年会館、独奏は小倉末子女史
- 30) 1918 (大正7) 年12月19日(木) 東京／朝刊5面1段 [KW：小倉末子12]
「我が音楽界希有の多幸なりし年、続々来朝した外国の名手連に刺戟されて甚大な印象を得た小倉末子女史の談」
- 31) 1919 (大正8) 年1月31日(金) 東京／朝刊7面4段 [KW：音楽7]
「音楽奨励会演奏」例により小倉末子女史独奏する事

- 32) 1919 (大正8) 年3月6日(木) 東京／朝刊7面5段 [KW: 音楽8]
「文芸美術」「音楽奨励会」ショパン会は小倉女史流行性感冒の爲め四月中旬に延期
- 33) 1919 (大正8) 年3月19日(水) 東京／朝刊7面5段 [KW: 小倉末子13]
「文芸美術」「小倉末子女史」寒冒全快により来る二十九、三十両日本郷青年会館、音楽奨励会、ショパンの曲二十を演奏
- 34) 1919 (大正8) 年6月18日(水) 東京／朝刊7面5段 [KW: 小倉末子14]
「演奏会」音楽奨励会が六回に亘って小倉末子嬢の演奏により洋琴音楽発達研究、其最後の演奏会、二十二日
- 35) 1919 (大正8) 年7月13日(日) 大阪／朝刊7面10段 [大音9]
「公会堂演奏会」小倉末子女史と鈴木のお子女史が大阪に来る、ピアノ同好会と楽友会主催、十九日
- 36) 1919 (大正8) 年7月19日(土) 大阪／朝刊7面4-9段 【写真: 来阪したピアニスト小倉末子女史 (向って左) と其の義姉マリヤ夫人 (右)】 [大音10] 「楽界の明星小倉女史、優に柔しい和服姿で」
- 37) 1919 (大正8) 年7月20日(日) 大阪／朝刊7面6-10段 【写真: 花束を捧げて (本社贈呈)、右より、小倉末子女史、北川あき子嬢、鈴木のお子女史、北川えい子嬢】 [大音11] 「花束に埋もれて、大阪に於ける感想を語る」
- 38) 1919 (大正8) 年9月21日(日) 東京／朝刊9面4段 [KW: 小倉4]
「音楽会」東洋高等女学校の同窓生、二十七日、神田青年会館に小倉、宇佐美両女史
- 39) 1919 (大正8) 年9月27日(土) 東京／朝刊7面4段 [KW: 音楽9]
「音楽会」「京華高女主催音楽会」十七日、神田青年会館、小倉末子
- 40) 1919 (大正8) 年10月22日(水) 東京／朝刊7面3-4段 [KW: 小倉末子15]
「学芸たより」「音楽奨励会」三十日、第三十九回演奏会、小倉末子女史がバッハ……の大作を独演
- 41) 1919 (大正8) 年11月5日(水) 東京／朝刊7面4段 [KW: 音楽10]
「学芸たより」「早大音楽会」十五日、神田青年会館、小倉末子
- 42) 1920 (大正9) 年5月24日(月) 東京／朝刊5面12段 [KW: 小倉末子16]
「和訳椿姫」昨日帝劇で開かれた小松耕輔氏送別音楽会、小倉末子女史のピアノ独奏
- 43) 1920 (大正9) 年9月27日(月) 東京／朝刊5面9段 [KW: 小倉末子17]
「今秋白眉の大演奏、器音楽の名流を集めて」ソシエータス・フィルハモニカ主催、来月十六日、小倉末子
- 44) 1920 (大正9) 年10月16日(土) 大阪／朝刊7面1-3段 [大音12]
「本社主催、第二回婦人界関西連合大会、十月二十五日」ピアノ独奏、東京音楽学校教授、小倉末子女史
- 45) 1920 (大正9) 年10月18日(月) 大阪／朝刊7面1-4段 [10/16に同じ] [大音13]
- 46) 1920 (大正9) 年10月19日(火) 大阪／朝刊7面3-6段 [10/16に同じ] [大音14]
- 47) 1920 (大正9) 年10月19日(火) 大阪／夕刊2面1-6段 【写真: 写真は小倉末子女史】 [大音15]
「婦人大会と演奏、小倉末子嬢のピアノ、碧空に金と銀の交響を」ピアニスト小倉末子女史
- 48) 1920 (大正9) 年10月20日(水) 大阪／夕刊2面6-8段 [大音16]
「本社主催、第二回婦人界関西連合大会、来二十五日」ピアノ独奏、東京音楽学校教授、小倉末子女史
- 49) 1920 (大正9) 年10月23日(土) 大阪／朝刊7面1-3段 [大音17]
「本社主催、第二回婦人界関西連合大会、来る二十五日」ピアノ独奏、東京音楽学校教授、小倉末子嬢
- 50) 1920 (大正9) 年10月25日(月) 大阪／朝刊7面5-8段 [大音18]
「愈本日、本社主催、第二回婦人界関西連合大会」ピアノ独奏、東京音楽学校教授、小倉末子嬢
- 51) 1920 (大正9) 年10月26日(火) 大阪／朝刊7面1-9段 【写真: 花環を受くるピアニスト小倉末子女史】 [大音19] 「療瘵と咲き乱れて、階上階下に溢る万葉の花」東京音楽学校教授小倉末子女史
- 52) 1920 (大正9) 年11月19日(金) 東京／朝刊11面4段 [KW: 小倉5]
「学芸たより」「洋楽伝来五十年記念音楽祭」二十日、東京音楽学校、久々にて小倉米子 [ママ] 氏

の出演

- 53) 1920 (大正9) 年11月21日(日) 東京／朝刊7面7-9段 [KW: 小倉6]
「音楽伝来五十年祭、聴衆を感動させた珍しい演奏、音楽学校希有の大入」小倉女史の独奏も夫々見事
- 54) 1921 (大正10) 年5月20日(金) 大阪／朝刊1面4-5段 [大音20]
「東京音楽学校管弦合唱団大演奏会、六月二日、昼夜二回、大阪中央公会堂にて」管弦楽付ピアノ、小倉末子
- 55) 1921 (大正10) 年5月21日(土) 大阪／朝刊1面5-6段 [5/20に同じ] [大音21]
- 56) 1921 (大正10) 年5月21日(土) 大阪／朝刊7面1-3段 [大音22]
「最高権威の大楽団、東京音楽学校大演奏会」管弦楽付ピアノの独奏はベートーヴェンの演奏者として双ぶものなき小倉末子女史
- 57) 1921 (大正10) 年5月22日(日) 大阪／朝刊1面5-8段 [5/21朝刊1面に同じ] [大音23]
- 58) 1921 (大正10) 年5月22日(日) 大阪／朝刊11面1-5段 【写真: 写真は小倉末子女史】 [大音24]
「楽聖ベートーヴェンの美しい競奏曲を弾奏する小倉末子女史、本社後援、東京音楽学校大演奏会」
- 59) 1921 (大正10) 年5月24日(火) 大阪／朝刊1面5-8段 [5/21朝刊1面に同じ] [大音25]
- 60) 1921 (大正10) 年5月27日(金) 大阪／朝刊1面4-6段 [5/21朝刊1面に同じ] [大音26]
- 61) 1921 (大正10) 年5月28日(土) 大阪／朝刊7面1-6段 [5/21朝刊1面に同じ] [大音27]
- 62) 1921 (大正10) 年5月31日(火) 大阪／朝刊1面5-7段 [5/21朝刊1面に同じ] [大音28]
- 63) 1921 (大正10) 年6月2日(木) 大阪／朝刊7面1-4段 [大音29]
「期待さる今日の大演奏、楽界空前の華やかさ、一行百八十名今朝来阪」小倉末子女史の弾奏
- 64) 1921 (大正10) 年6月3日(金) 大阪／朝刊7面1-3段 【写真: 大音楽会の盛況 (小倉末子女史の管弦楽附ピアノ弾奏と夜の聴衆)】 [大音30] 「美しき魅惑の世界に」繊巧雄勁なピアノ名手小倉女史の難曲ベートーヴェン
- 65) 1921 (大正10) 年6月3日(金) 大阪／夕刊2面1-9段 【写真: 着阪した東京音楽学校大管弦合唱団 [前列左から安藤幸子、小倉末子と思われる] (上図は指揮者クロン教授 (二日朝))】 [大音31] [KW: 小倉末子18] 「肉声の美と器楽の妙」「晴の舞台へ一行の来阪」快活な小倉末子女史
- 66) 1921 (大正10) 年9月25日(日) 大阪／朝刊11面1-3段 [大音32]
「大阪女子音楽会」大阪市北区女教員会、十二月二日、ピアノ独奏、東京音楽学校教授小倉末子女史
- 67) 1921 (大正10) 年10月1日(土) 大阪／朝刊7面1-3段 [大音33]
「清く美しい七百の演奏者、大阪女子音楽会は愈々明日、純真な心の表われ、自然の発露」小倉末子女史
- 68) 1921 (大正10) 年10月2日(日) 大阪／朝刊11面4-6段 [大音34]
「大阪女子音楽会」大阪市北区女教員会、ピアノ独奏、小倉末子女史
- 69) 1921 (大正10) 年10月3日(月) 大阪／朝刊7面4-6段 【写真: (三) ピアニスト小倉末子女史と独唱家長坂好子女史】 [大音35] 「清い愛らしい合唱や独奏に恍惚として感激に酔う五千の人々、小倉、長坂両女史の水際立った妙技」
- 70) 1921 (大正10) 年10月13日(木) 東京／朝刊7面3-4段 [KW: 小倉末子19]
「音楽」既報十六日夜開催する慶応義塾ワグネルソサイエティー、小倉末子の諸氏出演
- 71) 1922 (大正11) 年3月16日(日) 東京／朝刊7面5段 [KW: 音楽11]
「音楽」神戸女子学院 [ママ] 出身の東京在住は母校基金、二十七日夜青年会館、小倉、長坂の二女史出演
- 72) 1922 (大正11) 年3月22日(日) 東京／朝刊8面4段 [KW: 音楽12]
「音楽」神戸女学院、同窓会、東京支部は二十七日、神田青年会館、同校出身のピアニスト小倉末子
- 73) 1922 (大正11) 年4月6日(木) 大阪／夕刊2面3-7段 [大音36]
「初めて大阪の楽壇に立つ二閨秀の大演奏会、同志社婦人会主催」ショルツ教授や小倉末子女史なども、祝福
- 74) 1922 (大正11) 年4月22日(木) 東京／夕刊2面4-8段 [KW: 小倉末子20]

- 「三井邸の豪奢振り」英太子、二十一日夜麻布今井町の本邸、夜会には小倉末子女史の独唱 [ママ]
- 75) 1922 (大正11) 年 7 月 1 日 (土) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：小倉末子21]
「音楽たより」「小倉末子女史」令姉の病気により一切の家庭音楽教授中止
- 76) 1922 (大正11) 年 8 月 1 日 (火) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：小倉末子22]
「楽界消息」「小倉末子女史」八月三日より令姉と共に沼津に赴き九月上旬頃まで滞在の予定
- 77) 1922 (大正11) 年 9 月 17 日 (日) 東京／夕刊 2 面 3 段 [KW：小倉末子23]
「露国救済婦人会の活動、来月七日には演奏会を催す」神田青年会館で小倉末子女史
- 78) 1922 (大正11) 年 10 月 6 日 (金) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：音楽13]
「音楽界」「露西亜」飢饉救済婦人会主催、七日、神田青年会館、小倉末子嬢
- 79) 1922 (大正11) 年 10 月 10 日 (火) 大阪／朝刊 7 面 1-3 段 [大音37]
「本社主催、第四回、婦人界関西連合大会」ピアノ独弾、東京音楽学校教授、小倉末子女史
- 80) 1922 (大正11) 年 10 月 11 日 (水) 大阪／朝刊 7 面 1-4 段 [10/10に同じ] [大音38]
- 81) 1922 (大正11) 年 10 月 15 日 (日) 大阪／夕刊 2 面 1-8 段 【写真：小倉末子女史】 [大音39]
「待たる名演奏、楽界の権威者を集めた関西婦人界連合大会」東京音楽学校教授小倉末子女史
- 82) 1922 (大正11) 年 10 月 19 日 (木) 大阪／夕刊 2 面 1-3 段 [大音40]
「来二十三日、中央公会堂、婦人大会」ピアノ独弾、東京音楽学校教授、小倉末子女史
- 83) 1922 (大正11) 年 10 月 22 日 (日) 大阪／付録 1 面 1 段 【写真：大会にピアノを独弾する小倉末子嬢】 [大音41]「朝日グラフィック」
- 84) 1922 (大正11) 年 10 月 23 日 (月) 東京／朝刊 3 面 5-6 段 [KW：小倉末子24]
「各代表の五分演説、気焔堂を壓す、昨日大阪公会堂で大朝社の婦人大会第二日」小倉末子女史の独唱 [ママ]
- 85) 1922 (大正11) 年 10 月 23 日 (月) 大阪／附録 2 面 1-3 段 [大音42]
「咲き誇る芸園の花」「小倉嬢の独弾」かくて最後に小倉末子女史のピアノ独弾に移る
- 86) 1922 (大正11) 年 11 月 11 日 (土) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：音楽14]
「音楽だより」「東京市民会堂後援音楽会」十八日、神田青年会館、小倉末子女史
- 87) 1922 (大正11) 年 11 月 12 日 (日) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：小倉末子25]
「音楽だより」「京浜組合教会教師会主催」にて十八日、美土代町青年会館、小倉末子
- 88) 1922 (大正11) 年 11 月 12 日 (日) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：小倉 7]
「両生徒の名誉」ゴドウスキー、東京音楽学校訪問、小倉教授の生徒山田菊子嬢のピアノ独奏を聴きて大いに賞讃
- 89) 1922 (大正11) 年 11 月 15 日 (水) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：小倉末子26]
「音楽だより」「小倉末子女史」目下リストブラームスの作品を研究中なるが十八日夜神田青年会館、之を演奏
- 90) 1922 (大正11) 年 12 月 28 日 (木) 大阪／朝刊 8 面 5-7 段、広告 [大音43]
「詩と音楽、新年特別号」ピアノのトーンに就て、小倉末子
- 91) 1923 (大正12) 年 1 月 16 日 (火) 東京／朝刊 6 面 5 段 [KW：小倉末子27]
「音楽だより」「小倉末子女史」赤坂区榎坂町五番地に移転
- 92) 1923 (大正12) 年 11 月 1 日 (木) 大阪／朝刊 7 面 5-10段 【写真：[和服でグランドを弾く姿]】 [大音44]
「小倉末子女史、罹災者救恤、特別大演奏会、来る十一日、大阪中央公会堂大ホール」
- 93) 1923 (大正12) 年 11 月 5 日 (水) 大阪／朝刊 1 面 6-10段 [11/1に同じ] [大音45]
- 94) 1923 (大正12) 年 11 月 6 日 (火) 大阪／夕刊 2 面 3-7 段 [大音46]
「名曲の美と奏法の研え、十一日夜大阪中央公会堂にて、小倉女史の大演奏」東京音楽学校教授小倉末子女史
- 95) 1923 (大正12) 年 11 月 8 日 (木) 大阪／夕刊 2 面 1-4 段 [大音47]
「小倉末子女史、大演奏会、来る十一日、大阪中央公会堂大ホールにて」
- 96) 1923 (大正12) 年 11 月 10 日 (金) 大阪／朝刊 7 面 5-9 段 [大音48]
「愈明日、小倉末子女史、ピアノ演奏会」

- 97) 1923 (大正12) 年11月11日(日) 大阪／夕刊 2面 3-4 段 [大音49]
「盛況を思わせる、明日の大演奏、小倉末子女史は今晚西下」東都楽壇の明星小倉末子女史
- 98) 1923 (大正12) 年11月11日(日) 大阪／朝刊 7面 1-7 段 【写真：大阪ホテルのロビーでの和服姿】 [大音50]「愈今晚、午後六時半開場、大阪中央公会堂、小倉末子女史、ピアノ演奏会」
- 99) 1923 (大正12) 年11月12日(月) 大阪／朝刊 2面 1-3 段 【写真：[和服でグランドに向う舞台写真]】 [大音51]「同情と感激、昨夜の小倉女史演奏会」東京音楽学校ピアノ教授小倉末子女史義捐大演奏会
- 100) 1923 (大正12) 年11月21日(水) 大阪／朝刊 7面10段 (2点中の1点) [紙面2]
「蒲団毛布寄贈」金千四百六十三円二銭十一月十一日中央公会堂小倉末子女史大演奏会純益金
- 101) 1923 (大正12) 年11月21日(水) 大阪／朝刊 7面10段 (2点中の1点) [大音52]
「音楽会収入」去る十一日全関西婦人連合会主催で大阪中央公会堂に於て開催の小倉末子女史大演奏会
- 102) 1923 (大正12) 年11月22日(木) 東京／夕刊 2面 7 段 [KW：小倉末子28]
「蒲団演奏会上り高、千四百六十円」十一日関東へ寝具を送る運動、東京音楽学校教授小倉末子女史の大演奏会
- 103) 1925 (大正14) 年 5 月24日(日) 大阪 (神戸版)／朝刊11面 4-6 段 【写真：写真は小倉末子女史】 [大音53]「小倉女史とレーヴェ女史、三十日夜聚楽館で音楽大演奏会」東京音楽学校教授小倉末子女史
- 104) 1925 (大正14) 年 5 月29日(金) 大阪 (神戸版)／朝刊11面 7 段 [大音54]
「演芸たより」聚楽館、三十日午後七時から小倉末子女史レーヴェ女史音楽演奏会を催す
- 105) 1925 (大正14) 年 5 月31日(日) 大阪 (神戸版)／朝刊11面 5-7 段 [大音55]
「相継いで開かれる六つの音楽会」三十日夜の親和女学校汲温会主催の小倉末子、レーヴェ両女史、聚落館
- 106) 1926 (大正15) 年 6 月14日(月) 東京／朝刊 4面 2-3 段 [KW：小倉末子29]
「楽壇近事」小倉末子女史は六月二十日午後一時から帝劇で独奏会を開く
- 107) 1926 (大正15) 年 6 月23日(水) 東京／朝刊 5面 1-3 段 [演奏評] [KW：小倉 8]
「小倉女史の独奏、牛山充」帰朝当時音楽奨励会の主催で幾度か独奏会を開き、はつらつたる活躍振りを見せた小倉女史
- 108) 1926 (大正15) 年10月16日(土) 東京／朝刊 7面 1-2 段 【写真：右からストウピン氏、小倉末子女史、安藤幸子女史——昨夜小倉女史の家での練習】 [KW：小倉末子30]「因襲を破るこの顔合わせ、素晴らしい三重大演奏」
- 109) 1927 (昭和2) 年 3 月14日(月) 東京／朝刊 6面 1-2 段 [紙面3]
「ラジオ、東京」ピアノ独奏「ベートーヴェン祭第一夜」小倉末子
- 110) 1927 (昭和2) 年 3 月14日(月) 東京／朝刊 6面 1-2 段 【写真：小倉末子女史】 [KW：小倉末子31]「楽聖の百年祭」
- 111) 1927 (昭和2) 年 3 月25日(月) 東京／朝刊11面 1-4 段 【写真：[ベートーヴェン]】 [KW：小倉末子32]
「楽聖逝いて百年、盛んなベートーヴェン祭」小倉末子女史の「ソナタ」の独奏
- 112) 1928 (昭和3) 年 4 月20日(金) 東京／朝刊 9面 2 段 [紙面4]
「学芸だより」「三氏演奏会」二十一日午後二時、日本青年館、安藤幸子、小倉末子、ウェルクマイステル
- 113) 1929 (昭和4) 年10月18日(月) 東京／夕刊 2面 5-6 段 [KW：音楽15]
「日比谷の会堂開き」夜の部、ピアノ独奏 (小倉末子女史)
- 114) 1930 (昭和5) 年 3 月 7 日(金) 東京／夕刊 1面 3-5 段 [KW：小倉末子33]
「宮中竹の間に栄えの音楽会、皇太后陛下も御参内遊ばされ、きょう地久節の御祝」小倉末子女史のピアノ
- 115) 1931 (昭和6) 年 1 月30日(金) 東京／朝刊 3面 2-3 段 【写真：写真は当夜の小倉末子女史】 [KW：小倉末子34]「小倉女史の慈善演奏」都下女子教育者及び婦人団体有志主催の小倉末子女史洋琴独奏会、二十九日
- 116) 1931 (昭和6) 年 5 月31日(金) 東京／朝刊 9面 1 段 [紙面5]

- 「きょうの放送番組」洋楽の夕（三）八時十五分、ピアノ独奏、小倉末子
- 117) 1931（昭和6）年5月31日（金）東京／朝刊9面1+10段【写真〔紙面左上角2段抜〕：ピアノの小倉末子女史】[KW：小倉末子35]「ラジオ」「紙上アナウンス、AK三十一日の放送者」小倉末子女史
- 118) 1931（昭和6）年6月10日（水）東京／朝刊10面7-8段 [KW：小倉末子36]
「小倉、レーエ両女史を聴く」六日、日本青年館、小倉末子女史の演奏は徹頭徹尾ピアノの名にふさわしいもの
- 119) 1932（昭和7）年1月1日（金）東京／朝刊7面9-10段 [紙面6]
「二日の放送番組」八時三十分、ピアノ独奏、小倉末子
- 120) 1932（昭和7）年1月1日（金）東京／朝刊7面11-12段【写真（2段抜）：小倉末子】[KW：小倉末子37]「難曲と大曲、ピアノ独奏、小倉末子、後八時三十分より」
- 121) 1932（昭和7）年2月8日（金）東京／朝刊7面11-12段 [KW：音楽16]
「家庭／楽壇から期待される32年の女流新人群」片山ゆき子さんは小倉末子女史に師事した人
- 122) 1932（昭和7）年2月13日（土）東京／朝刊10面（家庭面）1-5段 [KW：小倉末子38]
「きょうは全国婦選デー、若し一票があったら私はこんな人に投票する」「女らしい女、小倉末子」
- 123) 1932（昭和7）年6月20日（月）東京／朝刊9面1-3段 [紙面7]
「きょうの放送番組」八時、チェロとピアノ独奏、シャビロ、小倉末子
- 124) 1932（昭和7）年6月20日（月）東京／朝刊9面7-8段【写真（2段抜）：ピアノ独奏、小倉末子】[KW：小倉末子39]「ラジオ、今日の放送番組」「チェロとピアノ独奏、後八時から」
- 125) 1933（昭和8）年1月12日（木）東京／朝刊9面（家庭面）1-6段 [KW：小倉末子40]
「幕あきは近い」二十一日、日本青年館、小倉末子女史主催の葬会ピアノ演奏会によって幕が切られ
- 126) 1933（昭和8）年2月17日（金）東京／朝刊11面（家庭面）1-6段 [KW：小倉末子41]
「愛なき家庭は哀し、独り悩んで堪えず、令嬢遂に死を選ぶ、絶命した櫻内本子さん」ピアノ、小倉末子女史の指導
- 127) 1933（昭和8）年4月15日（土）東京／朝刊7面1-3段 [KW：小倉末子42]
「ラジオ」「きょうの放送番組」「夜の部」八・〇〇、ピアノ独奏、小倉末子
- 128) 1933（昭和8）年4月15日（土）東京／朝刊7面6-9段【写真：〔和服の顔写真〕】[KW：小倉末子43]
「ピアノ独奏、後八時、小倉末子」
- 129) 1933（昭和8）年11月11日（土）東京／朝刊14面1-3段 [紙面8]
「きょうの放送番組」九・〇〇、ピアノ独奏、小倉末
- 130) 1933（昭和8）年11月11日（土）東京／朝刊14面1-3段、記事【写真（3段抜）：ピアノの前に立つ小倉末女史】[KW：小倉末1]「ラジオ」「明日の御喪儀を前に葬送行進曲を独奏、小倉末女史がピアノで」
- 131) 1934（昭和9）年3月17日（土）東京／朝刊14面1-6段 [KW：音楽17]
「ラジオ、和洋楽の粋を集めて」ピアノ協奏曲、ニ長調、ケッヘル537番、第一楽章、小倉末
- 132) 1934（昭和9）年3月19日（土）東京／朝刊5面7段 [KW：音楽18]
「奉祝演奏会」独奏の小倉教授を始め、小倉教授を独奏者とする、小倉氏の独奏も鮮やかであり
- 133) 1934（昭和9）年10月25日（木）東京／朝刊8面1-3段 [紙面9]
「きょうの放送番組」八・〇〇、通俗名曲の時間（第四回）ピアノ独奏、小倉末
- 134) 1934（昭和9）年10月25日（木）東京／朝刊8面1-3段【写真：〔顔のみ〕】[KW：小倉末2]
「小倉末女史のピアノ独奏、後八時、通俗名曲の時間、第4回」
- 135) 1937（昭和12）年1月17日（日）東京／朝刊5面1-5段 [KW：音楽19]
「色めく楽壇の春」三十一日、ピアノの小倉末子女史がヴァイオリンのユンケル氏と共に、三大ソナタを演奏
- 136) 1937（昭和12）年3月15日（木）東京／朝刊7面1-4段 [紙面10]
「ラジオ」「きょうの番組」八・二〇、室内楽、アウグスト・ユンケル、小倉末子
- 137) 1937（昭和12）年3月15日（木）東京／朝刊7面1-3段【写真：写真は上がアウグスト・ユンケル氏、下が小倉末子女史 [顔のみ]】[KW：小倉末子44]

- 138) 1937 (昭和12) 年 8 月 8 日 (日) 東京／夕刊 1 面11段 [KW：小倉末 3]
「定期叙勲」尚東京音楽学校教授の小倉末子女史も勲四等に叙せられ瑞宝章を授けられた
- 139) 1939 (昭和14) 年 5 月24日 (水) 東京／朝刊 9 面 6-7 段 [紙面11]
夜の部、ハ・〇〇、ピアノ独奏、小倉末子
- 140) 1939 (昭和14) 年 5 月24日 (水) 東京／朝刊 9 面 6-7 段 [KW：小倉末子45]
「ピアノ、小品三曲、小倉末子女史の独奏」久方ぶりに東京音楽学校の小倉末子教授がマイクの前に立ってピアノ独奏
- 141) 1940 (昭和15) 年12月 6 日 (金) 東京／朝刊 7 面 8-9 段 [KW：小倉末子46]
「女流音楽界の権威結ぶ」安藤幸子、幸田延子、神戸絢子、小倉末子、三浦環、長坂好子、鈴木信子、新興音楽会
- 142) 1940 (昭和15) 年12月10日 (火) 東京／朝刊 7 面10-12段 [KW：小倉末子47]
「新興音楽会」演奏会／二十二日、共立講堂、ピアノ二重奏、小倉末子、パウル・ショルツ
- 143) 1940 (昭和15) 年12月23日 (月) 東京／朝刊 3 面11段 [KW：小倉末子48]
「盛況の新興音楽会」小倉末子女史、パウル・ショルツ氏によるピアノ二重奏二曲も満場の絶賛を博し
- 144) 1942 (昭和17) 年 2 月26日 (木) 東京／朝刊 4 面 5-8 段 [KW：音楽20]
「皇軍将兵に感謝する音楽会、三月七日日比谷で」……小倉末子
- 145) 1944 (昭和19) 年 6 月 3 日 (土) 東京／朝刊 3 面 3-8 段 【写真：右から小倉末・長坂好子・立松ふさ・斎藤静子の四女史】 [KW：小倉末 4] 「四十名の先生勇退、音楽学校も衣更へ、「音感基地」へ一路邁進」小倉末教授
- 146) 1944 (昭和19) 年 9 月27日 (水) 東京／朝刊 3 面14段 【写真：[顔写真]】 [KW：小倉末 5]
「小倉末女史 (洋琴家、岐阜県出身)」二十五日午前死去、享年五十四、葬儀は二十九日午後二時から三時まで東京都赤坂区氷川町五の自宅でキリスト教で執行／女史は伯林王立高等音楽学校でハインリッヒ・バルト博士に師事し、大正四年シカゴのメトロポリタン音楽学校ピアノ科教授となり、大正六年から最近まで東京音楽学校教授であった、ピアノ教則本、ピアノ小曲集の著書がある
- 147) 1944 (昭和19) 年 9 月27日 (水) 大阪／朝刊 3 面14段 【写真：[顔写真]】 [紙面12]
「小倉末女史 (洋琴家、岐阜県出身)」二十五日午前死去、享年五十四
- 148) 1944 (昭和19) 年 9 月28日 (木) 東京／朝刊 2 面16段、広告 [KW：小倉末 6]
「小倉末」従三位勲三等、九月二十五日死去致候 告別式ハ九月二十九日午後二時ヨリ三時迄自宅ニテ施行可仕候 尚御供物等ハ堅ク御辞退申上候 東京都赤坂区氷川町五番地 兄小倉庄太郎

(原稿受理日 2013年 9 月30日)